



Data

監督:若松朗
 原作:かわぐちかいじ『空母いぶき』
 小学館「ビッグコミック」
 出演:西島秀俊/佐々木蔵之介/藤
 竜也/村上淳/石田法嗣/
 戸次重幸/市原隼人/平楚
 生成/金井勇太/工藤俊作
 /千葉哲也/山内圭哉/和
 田正人/玉木宏/横田栄司
 /高嶋政宏/堂珍嘉邦/袴
 田吉彦/渡辺邦斗/佐藤浩
 市/益岡徹/中村育二

👁️👁️ みどころ

護衛艦「いずも」の空母改修問題は、「防衛計画の大綱・中期防衛力整備計画」の中で盛んに議論されたテーマだが、その論点は？また、2015年5月に成立した「平和安全法制」では、何がどう整備されたの？さらに、“専守防衛”一辺倒だった自衛隊が“防衛出動”できるギリギリの状況とは？

それらをしっかり勉強しながら、20××年のクリスマスに起きる東亜連邦による波留間群島の初島占領と、それに向けた空母いぶきを旗艦とする第5護衛隊群の動きをしっかり確認したい。

もちろん、自衛隊を動かすのは官邸。そこでは、軍事以上に外交が大切だが、総理は米国や国連にいかなる働きかけを？そして、国連は機能しているの？

戦争に縁のなかった平成の30年間の終わり、令和元年を迎える今、平和ボケもほどほどに、本作をしっかり鑑賞したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 「いぶき」は攻撃型空母？それとも・・・？ ■□■

新しい元号が「令和」と決まった2019年4月1日以降の日本は祝賀一色(?)になっている。平成末期の平成30年(2018年)12月18日に策定された、新たな「防衛計画の大綱・中期防衛力整備計画」の中で盛んに議論されていたのが、護衛艦「いずも」の改修による空母化問題とF-35B戦闘機導入問題だが、それは令和に入るとどうなるの？そんな興味が深まる中、本作の試写の案内が届いたから、こりゃ必見！「空母いぶき」は「空母いずも」をイメージして命名された架空の艦名だが、その航空機の運用機能は？

自衛隊が保有する護衛艦「いずも」型の従来の機能は①ヘリコプター運用機能、②指揮

中枢機能、③輸送機能、④医療機能、⑤人員収容機能等だが、「防衛計画の大綱・中期防衛力整備計画」によって、新たに航空機運用機能が加わった。その航空機とはSTOVL機（Short Takeoff / Vertical Landing：短距離離陸・垂直着陸）のことで、具体的にはF-35Bのこた。ちなみに、去る4月10日には航空自衛隊三沢基地（青森県）の最新鋭ステルス戦闘機F35-Aが墜落したことが発表され、大騒ぎになっている。F-35Bは短い滑走で離陸して、垂直着陸ができるもので、F35-Aとは違う機種だが、政府は2018年末にはF35-AとF35-Bを合計105機買い増しすることを閣議了解している。ちなみに、F-35Aの一機あたりの取得価格は約116億円だ。

第5護衛隊群の旗艦で航空機搭載型護衛艦「いぶき」の司令部を構成するのは、群司令の湧井継治（藤竜也）、艦長の秋津竜太（西島秀俊）、副長の新波歳也（佐々木蔵之介）の3人。その航空機は第92飛行群などの約15機だ。また、「いぶき」の周りを囲む護衛艦は、ミサイル護衛艦いそかぜ、護衛艦はつゆき、イージス艦あしたか、護衛艦しらゆき、そして潜水艦はやしおだ。今、第5護衛隊群は小笠原諸島沖で訓練航海中だが、そんな「いぶき」は攻撃型空母？それとも・・・？

■□■「平和安全法制」の整備は？憲法違反の議論は？■□■

2015年5月の国会は、自衛隊法等、10本の法律を一括改正する「平和安全法制関連2法案」の審議で大荒れになったが、結局法案は可決成立し、2016年3月29日から施行された。これによって、①重要影響事態、②武力攻撃事態、③存立危機事態、等の概念が明確化されるとともに、「自衛の措置としての武力行使の新三要件」が次のとおり定められた。すなわち、①我が国に対する武力攻撃が発生したこと、又は我が国と密接な関係にある他国に対する武力攻撃が発生し、これにより我が国の存立が脅かされ、国民の生命、自由及び幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険があること。②これを排除し、我が国の存立を全うし、国民を守るために他に適当な手段がないこと。③必要最小限の実力行使にとどまるべきこと、だ。それまで“専守防衛”を国是としてきた日本の平和安全法制は、これによって“防衛出動”という新たなステップを認めることになったわけだ。

この平和安全法制関連2法については、憲法違反だと主張する声も強く、違憲訴訟も提起されたし、多くの学者、文化人たちが反対・違憲の立場を表明している。一国の平和安全法制を巡る議論に賛否両論があるのは当然だが、私はこの法案には賛成の立場だ。

■□■20××年12月23日、波留間群島初島が占領！■□■

本作の原作は「沈黙の艦隊」（90年）、「ジパング」（02年）で有名なかわぐちかいじの同名コミック。企画は『亡国のイージス』（99年）の福井晴敏だから、架空の物語ながらリアル感バッチリ！しかし、本作冒頭は、20××年12月23日未明、沖ノ鳥島の西方450キロ、波留間群島初島に国籍不明の武装集団が上陸した、というあっと驚く

ニュースからスタートする。

総理大臣の垂水慶一郎（佐藤浩市）、官房長官の石渡俊通（益岡徹）、副総理兼外務大臣の城山宗介（中村育二）ら官邸と主要大臣は、情報の収集と分析に大わらわだが、小笠原諸島沖で航海訓練中の第5護衛隊群に対して、直ちに現場に向かうよう命じたのは当然だ。初島に上陸した国籍不明の武装集団が、3年前に建国され、これまでも派留間群島の占領権を頑なに主張し、領海侵犯を繰り返していた、あの東亜連邦だとしたら、初島占領後、日本の第5護衛隊群が急航してくるのは当然想定済み。すると、その進路には、東亜連邦の潜水艦等が待ち受けているのでは・・・？そこでもし、武力衝突、人命損傷の事態になれば、ひょっとすると日本と東亜連邦との国家間の戦争に・・・？いやいや、今はそこまで考えても仕方ない。第5護衛隊群が初島の現場海域に急航するのはあくまで海上の警備行動だ。なぜなら、政府は情報の整理・分析中であって「重要影響事態」や「武力攻撃事態」の宣言はまだされていないのだから。

憲法議論もよし、安保法制議論もよし。それはそれで大いに議論すればよい。しかし、たかがマンガ、たかが映画であっても、今スクリーンの現実 현실だ。第5護衛隊群が初島の現場海域に急航している今、東亜連邦の潜水艦からのミサイル攻撃を受ければ、第5護衛隊群はどうするの？その判断は現場の湧井群司令や、秋津艦長がすることだが、日本国民としても平和憲法の下での安保法制がどうなっているかくらいはしっかり勉強し、押さえておく必要があるはずだ。

■□■論点整理は秋津艦長VS新波副長の議論を軸に！■□■

『沈まぬ太陽』（09年）等の社会派ドラマを手がけた若松節朗監督は“平和ボケ”に陥っている日本国民に対して、本作の論点を理解してもらうについて、空母「いぶき」の秋津艦長と新波副長の議論を軸としている。つまり、初島海域に急行している中でも、新波副長の考え方はあくまで「我々の任務は海上警備行動です。正当防衛以外、攻撃はできません。」であるのに対し、秋津艦長は湧井群司令に対して「直進しての攻撃命令」を進言していた。秋津と新波の2人は防衛大学同期でトップを争った仲だったが、「我々は戦争する力をもっている。しかし絶対にやらない」と言い切る新波に対して、「・・・戦わなければ守れないものがある」と切り返す秋津は、常に真っ向から対立していた。これは、新波が海上自衛隊出身で艦の中での人の和を重んじるのに対し、秋津は航空自衛隊のエースパイロット出身で個人の判断を重んじるという立場の違いからもきているらしい。本作では、コトあるごとにこの2人の議論が展開されるので、観客はその中でしっかり論点整理をする必要がある。

初島海域に急航する第5護衛隊群に対しては敵潜水艦からのミサイル攻撃が間近に迫っていたが、新波は自らは攻撃せず、迂回することを主張。つまり「直進して攻撃すべし」と主張した秋津とは正反対の意見具申だったが、湧井群司令は「このまま直進。ただし敵

が撃つまでは撃ってはならん」との命令を下した。そして、現実には飛んできた敵潜水艦からのミサイルを何とか撃ち落としかにみえたが、撃ち漏らした1発が「いぶき」の甲板に命中したから大変だ。空母が飛行甲板に敵弾を受ければ極めて弱いことは、1942年6月5日のミッドウェー海戦における、日本の主力空母「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」の沈没によっても明らかだが、さて「いぶき」の被弾の程度は？

艦載機を飛ばせるまでの修理には24時間、いや20時間はかかると言われたのを、「何とか12時間にしろ」と秋津は命令したが、「いぶき」の修理はホントに大丈夫？さらに、湧井群司令がミサイル攻撃によって負傷したため、指揮権は秋津に委ねられたが、まさにコトは緊急事態だ。さあ、そうなると秋津の責任は重大だが、正反対の意見を持つ新波副長との連携は大丈夫？

■□■「武力攻撃事態」の認定は？「防衛出動」の命令は？■□■

初島に上陸した武装勢力が東亜連邦であることが明らかになったうえ、空母「いぶき」がミサイル攻撃を受けて損傷し、人的被害まで発生したとなると、さて、官邸の対応は？「重要影響事態」や「武力攻撃事態」の認定は？そして、「防衛出動」の命令は？2011年3月11日に発生した東日本大震災による津波と福島第一原子力発電所の爆発という未曾有の大惨事は、たまたま民主党政権2代目の菅直人内閣の時だったが、もしあれが、今の自公政権による安倍晋三内閣の時だったら、少しはましな対応がなされたのでは？そう思うのは私一人だけではないだろう。しかし、20××年の今現実には起きている事態は東日本大震災以上の国家の大危機。一步対応を誤れば国家間の戦争に発展する恐れがあるから、官邸の主導力が重要だ。さて、垂水総理のリーダーとしての力量は？

第5護衛隊群の旗艦「いぶき」が敵潜水艦からミサイル攻撃を受けて損傷したとの報告を聞く中、強硬派の先頭に立つのは城山副総理兼外務大臣。まあ、外務大臣と言う立場上やむを得ない面もあるが、かなり強硬だ。それに対して、いかにも気の弱そうな(?)垂水総理はどう対応するの？官房長官の石渡が総理の女房役として、落ち着いているのは心強いが、外務省アジア大洋局長の沢崎(吉田栄作)が総理に「ここで対応を誤れば火は世界中に燃え広がります」と慎重意見を述べたのに対し、総理は「・・・そうだな」と静かに頷いたから、どうも、防衛出動の決断はまだのようだ。しかし、第5護衛隊群の進路上には潜水艦だけではなく東亜連邦の空母艦隊も待ち受けているらしい。そんな中、初島に向かった航空自衛隊の偵察機が、東亜連邦の戦闘機から攻撃を受け、対空ミサイルによって、搭乗員の大村(袴田吉彦)らと共に爆散すると、その報告を受けた垂水総理はついに“防衛出動”の命令を下すことに。もちろん、自衛のために武力の行使が許される防衛出動は、自衛隊創設以来はじめてのことだ。

■□■ミサイルは？魚雷は？「はつゆき」の炎上をどう見る？■□■

1931年9月18日に発生した満州事変は、関東軍による「でっちあげ」だった。そして、それ以降、満州での権益を拡大しようとする軍部とそれに反対する勢力のせめぎ合いが続いたが、結局は拡大派が勝利し日米開戦まで進んでいったのは歴史上の事実だ。それと同じように、本作でも初島海域に向けて急航する第5護衛隊群が、それを待ち受けている敵潜水艦や空母艦隊と正面衝突し、ミッドウェー海戦のような戦闘を繰り広げ、多数の死傷者を出すことになれば、コトは一気に局地的な戦闘から国家間の戦争へとエスカレートしていく可能性が高くなる。

それを防ぐためには、とにかく現場での戦闘を極力小さくし、国連を中心とする外交交渉で、初島から東亜連邦の武装集団を撤退させることを目指すしかない。そのため、防衛出動を命じた政府からは、同時に「外交交渉に影響する戦闘は極力回避されたい」との命令が、第5護衛隊群各艦に伝えられた。もちろん、秋津艦長もこの命令を遵守することに異議はないが、敵空母から戦闘機が襲来したり、敵潜水艦からミサイルや魚雷が発射されたら、「いぶき」はそして第5護衛隊群はどうするの？

そんな状況下、現実には海の底に潜んでいた敵潜水艦から「いぶき」に向けて複数の魚雷が発射されたから大変。それを制するために、潜水艦「はやしお」から先に魚雷を発射して敵潜水艦を撃沈することは可能だったが、「はやしお」の艦長・滝（高嶋政宏）はあえてその策を取らず、“ある奇策”を。その姿はスクリーン上でしっかり観察したいが、多分これは映画なればこそその操艦によるもので、現実にはありえない姿だろう。そのため、敵からの発射を許した魚雷群の多くは「はつゆき」の対潜ミサイルによって阻止できたものの、一発は「いぶき」に向かうことに。それを見た「はつゆき」の艦長・瀬戸（玉木宏）は自らの艦を盾にして「いぶき」を守ったため、魚雷を浴びて炎上。瀬戸も重傷を負うことに。これは、“防衛出動”が発令されても、なお“専守防衛”を全うしようとする自衛隊の理想的な姿だが、これらの犠牲をどう考えればいいのか？

■この「記者たち」の動きをどう評価？■

4月9日に観た『記者たち 衝撃と恐怖の真実』（17年）は「イラクが大量破壊兵器を持っている」との“フェイクニュース”をニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストを含む大手マスコミが信じる中、それに疑惑を持ち真実追及に精魂を傾けたナイト・リッター社の「2人の記者」を描いた秀作だった。多くのマスコミの中で一社だけが独自の主張を貫くのが難しいことは日本の産経新聞の例をみても明らかだが、同作の「記者たち」と彼らを叱咤激励した支局長の苦勞がいかにかきかたかきは、同作を見ればよくわかる。

それに対して、今「いぶき」に同乗している「記者たち」は、ネットニュース社 P-Panel の新人記者・本多裕子（本田翼）と東邦新聞の海自担当のベテラン、田中（小倉久寛）の2人だが、彼らの乗船は訓練航海の取材のためだから気楽なもの。ところが、情勢が急を告げる中、突然“訓練中止”と告知され、2人とも部屋の中に隔離されてしまったからアレレ……。

私は先日NHKで海自の最新鋭潜水艦「そうりゅう」の内部に入って密着取材を敢行した特集番組を見たが、そこで放映された内容は撮影が許可された範囲内だったのは当然。また、中国旅行に何度も行っている私は、2010年3月13日～18日の大連・威海・青島旅行で、1977年に就役し1998年に退役して青島の海軍博物館に展示されている潜水艦237艇の内部見学をしたが、そこでももちろん撮影は禁止だった。それと同じように、いぶきの訓練航海の取材をしている2人の記者たちも当然許可された範囲内での取材だったが、訓練中止となれば一切の取材もダメ。さらに、2人はヘリコプターでの退艦を告げられることに。ところが、裕子が「私たちは、今ここで起こっていることを伝えなければなりません。この艦にいさせて下さい」と秋津に詰め寄ると、秋津は何を考えたのか「これまで以上に規制は厳しくなりますが・・・」と述べて「いぶき」にとどまることを許したから、アレレ・・・？さて、秋津の狙いは？そして、2人の記者たちの取材は・・・？

東京のP-Panelのプロデューサーは晒谷桂子（斎藤由貴）だが、新米の裕子からの連絡が途絶えたのを心配していると、次に入ってきたのは何と護衛艦「はつゆき」が炎上している映像。何じゃ、これは！もちろん、こんな取材やSNSへの自由な投稿が許されるはずはない。もしこれが映画ではなくホントの話だったら、秋津艦長の首が飛ぶぐらいではすまない大ゴトだが、映画としては実に面白い。しかも、晒谷が知るより早く、この映像はSNS上で日本全国に流れたから大変だ。そのため、コンビニでは「すわ戦争勃発！」と考えて水や食料品の確保に走るバカな日本人の姿が映しだされる他、その対応（釈明？）のため、垂水総理は緊急の記者会見を開かざるをえないことに。もちろん、彼がそこで語ったのは、第5護衛隊群の行動はあくまで防衛のための行動であって、自衛権発動の範囲内だということだ。そのため、「これは交戦権の行使による戦争状態ではないか」と詰め寄る記者に対する彼の言葉は、「いえ、あくまでも自衛のためのやむを得ぬ戦闘です。わが国は絶対に戦争はしません」という力強いものだった。しかし、そんな官邸の思惑にもかかわらず、現場は・・・？

■□■敵駆逐艦も！空母からの艦載機も！■□■

近時の邦画では戦争映画の名作は少ないが、百田尚樹の原作を山崎貴監督が映画化した『永遠の0』（13年）は私の大好きな映画だ（『シネマ31』132頁）。同作では、“海軍一の臆病者！”と言われた主人公、宮部久蔵（岡田准一）のゼロ戦乗りとしての生きざまが示され、ラストでの特攻作戦が涙を誘ったが、そこで描かれたのは、まさに日米戦争そのものだった。しかし、本作ラストに向けては、いかに戦争を回避するかに腐心する第5護衛隊群の姿に注目したい。

「あくまでも自衛のためのやむを得ない戦闘」であって、「絶対戦争はしません。」という垂水首相の言葉は、現場ではいかにも苦しい言い訳に見えた。しかし、初島に向かう第5護衛群を待ち受け、ミサイルを発射しようとしている敵駆逐艦に対する秋津と新波の議

論を聞いていると、ここでもなお、「外交交渉に影響する戦闘は極力回避されたい」との命令を何とか守ろうとする自衛官の心意気が伝わってくる。敵駆逐艦からのミサイル攻撃を阻止するためには、対艦ミサイルでの攻撃が妥当。ところが、新波は「敵の駆逐艦を撃沈させ、2艦で乗員600名の命を奪えば、戦線は拡大し戦争に繋がる。我々自衛隊はその戦争を避けるためにあるのではないか！」と強硬に主張したから、そこで秋津と新波の対立が深刻になるのかと一瞬心配したが、そこで秋津が下した決断は、ミサイルではなく、「いそかぜ」の主砲による砲撃だった。それなら、敵駆逐艦に損傷を与え、ミサイル攻撃を阻止するだけで敵艦は沈まない、というわけだ。もちろん、そのためには護衛艦の主砲からの正確な砲撃が不可欠だが、そこは「いそかぜ」の艦長浮船（山内圭哉）の腕を見込んでの判断だ。

さらに、本作ラストに向けて、敵空母からの艦載機によるミサイル攻撃と、それに対抗するため迫水（市原隼人）を隊長とするアルバトロス隊5機を「いぶき」から発艦させていく姿を見ると、こりゃミッドウェイ開戦のミニ版。アルバトロス隊は激しい空中戦の中で敵4機を撃墜させたものの、残り6機が放ったミサイルが柿沼の2番機に集中。全速で降下し逃れようとする柿沼に緊急脱出が命じられたが、1機150億と言われる最新鋭戦闘機F36を失うことを恐れる柿沼は応じない。それに対する迫水の叫びは「機体は替えがきく。お前は替えがきかん！」だったが、それを聞いた柿沼は？

■■■国連の安保理は？現地の国連軍は？■■■

東亜連邦による初島の武力占領。そんな事態を受けて、日本政府は第5護衛隊群を現場に急航させると共に、同盟国アメリカに協力を求めたり、国連（の安保理）に東亜連邦に対する撤退勧告等の措置を要請したのは当然。そのため、第5護衛隊群の動きを東亜連邦の潜水艦、駆逐艦、空母が目目していたのと同じように、初島の周辺海域に潜むアメリカや中国の潜水艦もそれを注目していた。一定の武力衝突は必至！という想定の下、強力な米海軍の動きは？アメリカの空母艦隊を大移動させれば、世界中が「すわ戦争か！」と大騒ぎになるのは必死だが、海底に潜む米潜水艦部隊の移動だけなら誰もそれに気がつかない。さあ、米潜水艦やそれに対抗する中国やロシアの潜水艦の動きは？そして、国連（の安保理）や国連軍の動きは？

本作を観ていても、そんな舞台裏の外交や軍事上の動きは全くわからないのは当然だ。そんな中、敵駆逐艦に主砲を命中させることによって、沈没させることなくミサイル発射能力を奪い、また、空母の艦載機同士の空中戦でも、150億円相当のF36を1機だけ失ったものの、尊い人命を守ることができた第5護衛隊群は一安心。ところが、それまではミサイルの発射だけだった東亜連邦の複数の潜水艦から一斉に複数の魚雷が放たれると、「いずも」はそれを回避することができるの？そんな絶体絶命の状況の下、スクリーン上ではあっと驚く想定外の事態が・・・。

なるほど、これが国連の力！これだけ国連が機能すれば大したものだ。もっとも、2019年の今までは何でも中国とロシアが反対したため、国連（の安保理）はほとんど機能しなかったのが現実だが、20××年にはこんなすばらしい状況に……。私としては、それが漫画の世界や映画の世界だけではなく、現実の世界であることを祈るばかりだが……。

2019（平成31）年4月19日記